

## 国指定・天然記念物「水原のハクチョウ渡来地」 とハクチョウ保護について

佐藤 巖

水原町観光管理事務所, 959-2022 新潟県北蒲原郡大字水原303-1

### 瓢湖の歴史と保護区域の拡大

瓢湖は県都新潟市から東へ約20km、水原町の東端に位置し、周囲が約1.2km、水面約8haたらずの小さな人造湖である。水原近郷は五頭山脈と阿賀野川に抱かれた穀倉蒲原平野の中心部で地勢は概ね平坦、耕地が多く、整然とした水田が開けている。冬季は大陸性の北西季節風が雪を伴って吹き、多いときには1.5m程の積雪をみる。

瓢湖は、水原郷が江戸時代の寛永2(1626)年の大干魃に遭い、この解決策として造られた農業用水の溜め池である。寛永3(1627)年に起工し、寛永16(1639)年に13年間の歳月を要し完成した。当時は、約16.3haであった。現在の池の南側にもう一つ小池があつて、ちょうど瓢箪の形をしているところから「瓢湖」と呼ばれるようになった。瓢湖は五頭山系の山水を大通川から取水し農業用水として使っていたが、農業用水路が整備された現在その役目を終え、天然記念物「水原のハクチョウ渡来地」として重要な文化財保存地帯となっている。

昭和40年代になると、瓢湖周辺も都市化が進み、水田の埋め立て等自然環境が変化した。町は水鳥のよりよい生息環境を保護し保存する方針を決定した。五頭連峰を背景とした瓢湖の景観を活かし、四季を通じて自然と親しむ憩いの場、自然公園的な情操教育の場等を目的とした通年利用できる公園整備を行うべきとの考えから「瓢湖水きん公園計画」が策定されることとなった。その後、国や県の補助金を得て瓢湖周囲の農地を昭和46(1971)年度から昭和52(1977)年度にかけ20.8haを買収した。この買収地も昭和58(1983)年7月に国の天然記念物に指定され、保護区域(瓢湖水きん公園)は約30haに拡大された。

以後、20年余の歳月を経過し平成12(2000)年度に「瓢湖水きん公園」の外郭が完成した。新しい池には様々な植物が生え、すでに水鳥の休息地になっている。

### 瓢湖のハクチョウ保護

第二次世界大戦後の昭和25(1950)年、瓢湖にオオハクチョウが初めて渡来した。この時、近所に住む故・吉川重三郎翁が、珍しくて美しいハクチョウに瓢湖に永く居

てほしいと思い餌を与え始めた。当時、警戒心の強い野生のハクチョウに餌を与えることは困難をきわめ、重三郎翁は変り者と言われたり舌筆に言い表せない苦勞の末、昭和29(1974)年2月、日本で初めて餌付けに成功した。他に例が無いと、3月には国の天然記念物「水原のハクチョウ渡来地」として指定を受けた。

重三郎翁の没後は、長男の繁男氏がハクチョウ保護を引き継がれ、重三郎翁の志を守り保護活動を発展させた。吉川親子の保護活動が新聞やテレビで全国に知られるようになった。

また、昭和30年代の後半頃から小中学校児童生徒による餌集めや、パトロールなどの保護活動が始まり、町内全体にハクチョウ保護の機運が高まっていった。昭和46(1971)年3月、民間自然保護団体「瓢湖の白鳥を守る会」が結成され、瓢湖を守る施策やハクチョウ保護に関する調査研究・事業に取り組み、町当局に提言や協力をし続けて活動は今年で30周年を迎えた。また、昭和50(1975)年には町立水原小学校で児童の自主活動による「白鳥パトロール隊」が結成された。餌づくり、遊歩道清掃、飛来数カウント、水温・気温の測定などの主な活動の他、県外の小学校との交流を続け現在に至っている。

その他、学術調査で環境省の渡り鳥バンディング調査では、1シーズンに1,000羽のカモに標識をつけたり、関係者によるネットワーク作り、小中学生の環境学習の場などの地味な保護活動も続けられている。

初めた瓢湖にハクチョウが飛来してから50年を経過し、日本各地の飛来地の状況や飛来数等は大きく変化した(表1)。日本の食料事情も戦後の食料不足から飽食の時代を迎え、まだ食べられる残り物の食材は金を出して処分する時代になっている。

瓢湖が広く知られるようになって、町内を始め県内外の個人・団体・企業等から餌が送られるようになった。現在も年間、約200件以上の寄付があり、町で与える餌はほとんど寄付で賄っている。

平成7(1994)年からハクチョウ保護は、町で行うようになった。現在も瓢湖ではハクチョウ飛来の時期には1日3回給餌している。また、観光協会に委託し町独自で製造した餌(米をはぜたもの)を誰でも餌として与えられるようになっている。足元まで近寄るカモやハクチョウが与えられた餌を啄ばむ様子は訪れる老若男女を問わず感動を与え、自然愛護や環境保護を考えるきっかけや、人とハクチョウのふれあいの場にもなっている。

ただ、ここで強くお伝えしたいことは、瓢湖のハクチョウやカモは、全部与えられた餌を食べているように思われていることである。現状は瓢湖に飛来するハクチョウの95%以上がコハクチョウであり、そのほとんどは瓢湖周辺の水田で自然採餌をしている。カモもハクチョウ同様で、人の与える餌を採るのは餌場周辺の鳥のみである。

瓢湖のハクチョウやカモの餌付けについては様々意見はあるが、いままで大量死や伝染病等の心配される事例は無かった。瓢湖は、野生動物の餌付けの成功例として評価されている。

ハクチョウ飛来期間は、瓢湖の周りに立ち入り区域を設定し、ハクチョウやカモが周りからの外敵を恐れないよう配慮している。瓢湖では世界一過密であるが、安全な休息地と豊富な餌場が広がる水原町の瓢湖に、今年も6,000羽を越えるハクチョウが渡ってきた。

瓢湖には、野生の鳥が人間を怖がらない信頼関係ができあがっている。

(2001年11月22～24日に新潟市で開催された第2回ラムサールシンポジウム新潟で配付された資料を、著者の了解をいただいて、ここに転載した)